

収録・解説 酒井董美

語り手 大原寿美子さん
(明治40年生まれ)

昭和62年8月23日収録

あらすじ

昔、正直なおじいさんがおあって、氏神さんに日参をしていた。ある日、「拝殿の前に頭巾がある。かぶるとりゃあ、木じゃろうが鳥じゃろうが何の言つことも聴き分けられる」と氏神さんが言われたので、それを拾って帰っていった。

途中、野原で腰かけると、カラスが木の枝に止まって話し始めた。「人間で分かんもんじゃあ、あそこの隠居さんは蔵あ建てられたが、その蔵のコミ(壁の下地)の羽目板に蛇が挟まって、苦しみなから死んだじゃ

聴き耳頭巾

(八頭郡智頭町波多)



イラスト・福本隆男

正直なおじいさんに幸せ

鳥の言つことがありあり。おじいさんは「そうか、礼をもらって、帰ったぞうわけじゃけえ、診たっつえな」

と分かるわ」と感心して、その家に入って行って旦那さんをお嬢さんの体が痛のコミをはぐって蛇を川に流してやったら旦那さんの病気は治られて、大喜びをしたそう。

おじいさんは大きなお礼をもらって、帰ったぞうわけじゃけえ、診たっつえな」

おじいさんは「そうか、礼をもらって、帰ったぞうわけじゃけえ、診たっつえな」

おじいさんが娘さんの部屋に泊まったら、夜中に松が松の見舞いに来られたけど、部屋の下に

この話は、当地では比較的珍しいものである。中国地方では岡山県3話

あ、また松の芽を腐らかす。生きることも死ぬることもかなわん、たいへん苦しんどる。部屋の下を取れば治るに」と言つ。

そこで、その部屋の底話大成』で戸籍を眺める

気が治ったそう。

頭巾を持っていたの

重宝がられたそう。

「どきやなお礼をして

ええやう」。おじいさん

「それじゃあ一期、うちの

解説